

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：23102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21530815

研究課題名(和文) 演劇作成による英語能力向上

研究課題名(英文) Improving English skills through drama

研究代表者

NG Patrick (NG, Patrick)

新潟県立大学・国際地域学部・准教授

研究者番号：40454970

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究によって、日本の学生達はオーラル英語を学習するうえで、Readers Theatre(以降RTとする)を前向きにとらえていることが明らかとなった。繰り返し声に出して英文の台本を読むことで、発声や発音の改善が見られた。物語の登場人物を生き生きとよみがえらせるように、台本の音読を重ねるたびに、英語が流暢になっていった。十分に与えられた練習時間内で、学生達は特に声のトーンやテンポに工夫を施していた。大多数の参加学生はRT活動を前向きにとらえていたものの、クラスの他の学生達の前で、演技することに関して、数名は初期の段階で抵抗を示していた。

研究成果の概要(英文)：The results of the study showed that Japanese students reacted positively to the use of Readers Theatre (henceforth, RT) as a way to improve their spoken English. Repetitive oral reading of scripts helps to develop better voices and articulation and makes the script performance a meaningful and exciting experience for the students because they were directly involved in the script performance. Oral fluency was developed every time the student tried to make the characters come alive through repetitive readings of lines. Students were able to explore the use of tone and pitch to strengthen their imaginations as they were given sufficient time for practice. However, although a majority of students enjoyed the RT activity as a way to improve their spoken English, a few were initially resistant to the activity because they did not feel comfortable acting in front of their classmates.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：教育方法 演劇

1. 研究開始当初の背景

日本人学生は一般的にはオーラル英語を苦手としている、と見られている。英語を母語としないうちから、彼らにとって、オーラル英語のハードルは高い。一方、高等教育において英語を使ってコミュニケーションをとることは、グループで英語で発表を行なうなど、非常に大切なスキルである。RTは、複数の読み手が台本の音読を通して、発表するというスタイルをとっている。学生はあらゆる分野から題材を選び、最小限の準備で実行することができる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の問題意識を持ちながら、日本人学生がRTを使っての英語向上に関して、どれほど前向きであるかを調査することである。

- a) EFL 学生は、RT を使用してのコミュニケーション・スキル学習をどれほど前向きにとらえているか。
- b) 登場人物の描写を基本とするRTは、どれほど学生の英語学習意欲をかき立てているか。
- c) RTは学生達のクリエイティブ・ライティングおよびリスニング力向上に、どれほど貢献しているか。
- d) RTを授業のアクティビティに応用することで、日本人学生は英語コミュニケーション能力をどれほど向上させているか。

3. 研究の方法

(1) 先ず、RTの教育的価値や実践方法に関する先行研究を行なった。ここでは特に、日本のEFL教育の現場で、RTがどのように実際に用いられているかを明らかにすることを重視した。先行研究の調査のため、筆者は毎月の図書館や教育機関を訪問し、直接調査を行った。また、複数の教育機関でRT教育が実際に用いられている様子を把握するため、筆者は国内外の関連会議に参加し、状況を整理した。さらに、関連分野で活躍する国内外の研究者達と意見交換を行なっている。

(2) 次に、データ収集や分析などに関して、日本、シンガポール、中国出身の同僚達と意見交換を行なった。学生がRTを前向きにとらえているかを把握することができるよう、授業内のアクティビティを工夫した。さらに、学生達の感想を汲み上げるため、複数回にわたるアンケート調査を実施した。そして、アンケートの結果に基づいて、学生の学習ニーズに合致するよう、RT授業を改良した。また、コミュニケーション英語におけるRTの役割をどう認識しているかについて、日本でワークショップなどを開催し、関連教員からの意見を汲み上げた。

4. 研究成果

(1) アンケートの結果によると、学生は基本的にRTを前向きにとらえていることがわかった。例えば25名からなるクラスのうち、96%の英語部副参加者がRT授業を楽しむことができた、と答えている(表1参照)。

表1

	強くそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	全くそう思わない
アクティビティを楽しむことができましたか	72%	24%	4%	0%	0%
台本音読が楽しかったですか	52%	32%	12%	4%	0%
準備時間があればもっと多くやりたかったですか	48%	28%	20%	4%	0%
役が異なればもっと良かったですか	24%	20%	40%	12%	4%
このアクティビティを終えて、他の読物にも興味出できましたか	48%	28%	20%	4%	0%

また、84%の学生が台本を読むことを楽しむことができた、と答えた。反応が良かった学生は、次のことを良い点として指摘している。RTで演じることは楽しかった。独創的なアクティビティだった。観客を前にして演じることで、スピーチの自信がついた。発音を改善するうえで、有効な方法だった。英語を話す機会を得ることができた。友達と協力することができた。

(2) RTを通じて、様々な不安を感じていた学生達は、感情、感覚や声などを工夫しながら、徐々に台本を用いて役に投入した。また、協力しながら、進めることで、学生達の不安感が徐々に薄れていくことが観察できた。

(3) 学生達が作った台本は独創性や想像力に満ち、英語の正確さやストーリーの複雑さが現れていた。具体的に台本政策に関連する言語スキルを教わることがなくても、学生達は質問を投げかけ、答え、意見を述べ、諷刺するなど、様々な要素を盛り込んでいた。

(4) RTは日本の英語教育にとって、価値あるものである。RTを通して、学生が外国文学に触れ、オーラル英語を練習する機会を得ることができる。日本で用いられている一般的な英語教育は、おそらくRTとかけ離れていると推測する。しかし、良いRTは学生に実用的な英語教育を提供することができる。学生が英語を使って、コミュニケーションをとることを促すために、RTは学生を様々な文化に触れさせるよう、工夫して提供される必要がある。

(5)RTの実施にあたり、壁こぶつかる学生も数名いた。オーラル・リーディングのスキルを身につけるため、RTに前向きに取り組んだ学生が大半を占めていた。しかし、クラスメート達の前で演技することに抵抗を示す学生も数名いた。また、口語英語に自信のない学生は、台本の役割分担などで、消極的な態度を示す場面もあった。台本を使って演技する経験がないため、声で表現することが難しいと話す学生もいた。

(6)こうした問題点をふまえたうえで、RTは日本人学生の英語学習にとって、コミュニケーションをとる自信をつけるなど、やはり効果的なツールであることを強調したい。また、オーラル英語の力を向上させるにあたって、RT教員は、RT練習では学生の英語レベルに合わせて題材を選ぶこと、学生が理解を深め、感銘を込めて読めるために、できるだけ会話が多く、面白い題材を選ぶことに留意する必要がある。

(7)最初の学期(2012年5~6月)では、勤務先で、1年生を対象として演劇作成によるアプローチを使った課題をデザインした。学生には段階別読本「不思議の国のアリス」をベースにして台本を書くように指導した。その目的は、演劇作成によるアプローチが学生の英語コミュニケーションスキルを改善する手助けになるかを確認するためである。学生が自身の台本に基づいてリハーサルを行うなか、私は彼らによい劇にするための発音改善の重要性をたたき込んだ。ほとんどの学生が、このアプローチはコミュニケーションスキルだけでなく、他のスキル向上に向けてもやる気を起こさせるものであると述べていた。また、学生は、非常に熱心に課題に取り組み、劇を演じることを楽しんでいて、一方、数名の学生からは、練習する時間がもう少しほしいとの声も寄せられた。

(8)2014年前期に授業で「読者劇場」を実践し、1年生に日本文化に関する台本を書かせた。彼らには日本文化を日本語で音読させ、その次に新潟で学ぶ外国人留学生に日本文化を紹介する台本をデザインさせた。学生達はとても熱心に台本を書いており、また日本文化の知識を披露するのにすばらしい劇を演じてくれた。また、外国人留学生に文化を説明するのに「読者劇場」を使うことについて、学生がどう思っているかについても調査を行った。学生の回答はとても好意的で、その調査結果を用い、次学期に教える多文化理解に「読者劇場」を使用することの意義について、雑誌に寄稿する予定にしている。更に、2014年3月に広島で行われた「教育と人的資源開発」についての会議でも発表を行った。その発表は、「読者劇場」での台本の読み書きが、1年生にとって会話スキルを向上させる動機付けになるか否かについて説明するものであっ

た。約15名の参加者と活発な質疑応答がなされた。

また、コミュニケーションのための英語を教えるのに「読者劇場」を使用することについて卒論を書いた4年生の指導教員も務めた。最後の4年間で収集した研究と情報を基に、日本人の英語学習者にコミュニケーションのための英語を教える方法として「読者劇場」を使用する内容で卒業研究科目をデザインした。それは学生に「読者劇場」を使用することの教育的意義を理解させ、また学生もコミュニケーションのための英語を学ぶのに「読者劇場」を応用する機会を得ることができた。また、「読者劇場」に関する論文や章を執筆し、更にハンドブック出版の可能性についても編集者と協議している。ハンドブックは、小学校教員が「読者劇場」を使うことによって英語を教えやすくなることを伝えている。

(9)ReadersTheatre 活動に対する学生の関心を高めるため、多岐にわたる段階別読本や物語を使用するようにする。彼らは日本文化について原稿を執筆し、それを演じることに非常に興味があることが見受けられる。日本食や習慣等日本文化について学ぶことができるようなクラスを更にデザイン、実践したいと考えている。日本文化について話す手段として ReadersTheatre を活用するよう学生を励ましていきたい。また、多文化リテラシーを教えるのに ReadersTheatre を使用することも計画している。現在私は、「World Englishes」のコースを担当しており、ReadersTheatre をその授業に取り入れていきたいと考えている。更に、ReadersTheatre に関する書籍執筆も考えており、それが ReadersTheatre を実践している他国の教員のティーチングの一助となるようにしたい。今後、海外で開催される学会等でも研究成果を発表し、授業でも ReadersTheatre の活用に興味を持っている若手の同僚の手助けを続けていきたいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

Patrick NG. Dramatising the EFL classroom through Readers Theatre. *The Language Teacher*. Japan Association of Language Teaching. JALT publication. Issue 36:2, pp.28-29. March 2012. (peer-reviewed)

Patrick NG. Readers Theatre. Readers Theatre in the Chinese EFL classroom: Setting the stage for oral performance. King Mongkut 's University of Technology

Thonburi *Journal of Language Education*. February 2011, vol 14, pp1-5. (peer-reviewed)

Patrick NG. Readers Theatre: Improving oral proficiency in a Japanese university EFL course. *English Language Teaching World Online*. Centre for English Language. National University of Singapore. Volume 2.p1-15.December 2010. (peer-reviewed)

Patrick NG Chin Leong. Dramatising the ISRD classroom through Readers Theatre. 国際地域研究論集第一号. 2010.Vol.1.pp.37-49. University of Niigata Prefecture. (non-peer reviewed)

[学会発表](計5件)

Patrick Ng Chin Leong. The Power of Readers Theatre in the North-East Asian Classroom. The 1st Annual N.E.A.R. Language Education Conference. May 30 2009. University of Niigata Prefecture.

Patrick Ng Chin Leong. Readers Theatre : Dramatising environment issues for oral skills development. The Asian Conference on Education. Local Problems, Global Solutions? October 25, 2009 Ramadan Hotel, Osaka Japan.

Patrick NG Chin Leong. Setting the Stage for Communicative Competence in the Chinese EFL classroom through Readers Theatre (Workshop). The Sietar Japan 25<sup>th</sup> Annual Conference. Bunkyo Gakuin University, Tokyo. October 22-23, 2010.

Patrick NG Chin Leong. Readers Theatre in the Asian EFL classroom: Setting the stage for Intercultural Communication. Languages of Education: The Chinese Context. The Hongkong Institute of Education. October 30-31, 2010.

Patrick Ng. Foreign Language education in the Japanese EFL classroom. Hiroshima. The Conference on Education and Human Development in Asia. March 2-4, 2014.

[図書](計1件)

Patrick NG C.L. (2013). Readers Theatre: Setting the Stage for Oral reading Fluency. In Mahrooqi, R. & Roscoe, A. *Focusing on EFL Reading*. pp.190-209. UK: Cambridge Scholars Publishing.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

NG Patrick (NG, Patrick)

新潟県立大学・国際地域学部・准教授

研究者番号 : 40454970